

Can I join your pajama party? : イスラエル—パレスチナ境界線チェック・ポイントでの会話から¹

三宅良美

Can I join your pajama party? : standing on an Israel-Palestine checkpoint

Yoshimi MIYAKE

Abstract

Seventy checkpoints are located on the borders between Israel and the occupied territories, where Israeli soldiers check all the Palestinians entering Israel. Based on a participant observation on one of the checkpoints with Nablus, we argue that verbal and non-verbal behavior among Israeli soldiers, Palestinians, and Israeli women's volunteer group, called *Machsom Watch*, symbolizes the asymmetrical relationship between Israel and Palestine. For this discussion, Israeli soldiers' linguistic behaviors such as their 'Arabic language', imperative forms, and jokes are analyzed, while Palestinian non-verbal behavior such as silence is interpreted as an act of resistance.

1. イントロダクション

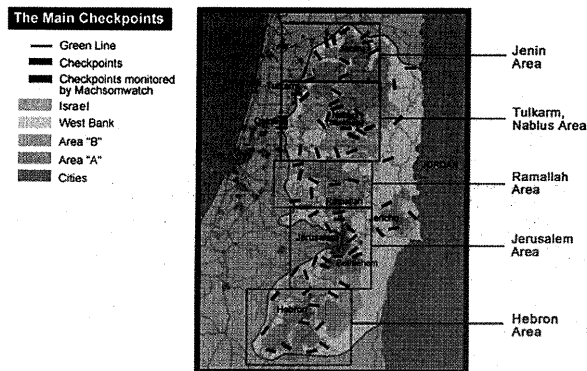
イスラエルとパレスチナとの境界およびパレスチナ内には70のチェック・ポイントがある(Machsom Watch 2003)。パレスチナ人がイスラエル側に入るときと出るときには、必ずこのチェック・ポイントをパスしなければならない。このチェック・ポイントは24時間通過できるわけではなく、朝9時から夕方6時までのみ。車で通るラインと、歩行者のラインとがあり、前者のほうの渋滞もあるが、後者のほうの列では途方もなく時間が過ぎてゆくことがある。そこには常時数人のイスラエル兵士がいて、通過する人たちのIDカードと荷物をチェックする。時間外にはゲートそのものが封鎖されるため、通過は不可能となる。

2004年7月4日(日曜日)は、Beit Iba (以下、 Beit・イバと表記) という、Nablus (以下、

ナブロス) とのチェック・ポイントにおいて、兵士、通過するパレスチナ人、そして、Machsom Watch 'チェック・ポイント・ウォッチ' (以下、MW) と呼ばれるボランティア・グループとともに一日中立って、チェックの状況を観察したり、両サイドと話したり、会話を書き取ることができた。本論は、その会話をもとに、イスラエルとパレスチナ間関係の縮図としてのチェック・ポイントを論じるものである。

ここでは、まず最初にチェック・ポイントで行われる会話の特徴について論じ、それから議論をMW、イスラエル・パレスチナ問題、そして、女の問題について考えたいと思う。

私は中東問題そのものについては無知に等しく、境界線についても様々な議論があるのに、そのこともよく知らない。ここでは、言語学、社会言語



(www.machsomwatch.org)

学の側面からある事象を論じる一人として、またジェンダー論の立場から、これらチェック・ポイントで行われている言語活動についてのみ報告、そして、解釈させていただきたいと思う。

ベイト・イバのチェック・ポイントで通行人をチェックするのは、コンスタントに4人。うち一人が、Orit (仮名、以下オリットと表記) という、ここにきて9ヶ月、という大柄の女兵士だった。このオリットと、その他の兵士たちと通行人との会話の特徴を中心に報告する¹⁾。

2. 言語的側面

2. 1. 一方通行

会話は全てイスラエル兵士側によりイニシエートされ、そして、イスラエル兵士側により終了される。パレスチナ人は燃えるようなオレンジ色のカバーのIDカードを持たされているが、それを兵士に出すことにより会話が始まり、兵士のIDカード返還により会話は終了する。

チェック・ポイントでは兵士が一方的に質問しパレスチナ人通行者は返事を要求されない限り沈黙したままである。兵士のアラビア語は初級アラビア語以前のもので、オリットはじめ、兵士たちは次ぎの文を何度も何度も繰り返す。

1) オリット:

Chamsa banaa, wachad, wachad,
(次ぎの) 5人(女性形)。ひとりずつ。(アラビア語)
Laat, laat.
ゆっくり, ゆっくり。(アラビア, ヘブライ語)
Taali, taali.

来い, 来い。(アラビア, ヘブライ語)

通行者は長蛇の列にしびれを切らして後部から前進し始める。すると、オリットらは再び怒鳴り始める。

一方、疲れのせいか通行者がしゃがみ始めると、兵士たちが叫ぶ。

Stand up, Stand up, Banaa.

立て。立て。(英語) 女の子たち(アラビア語)。

このように、兵士たちは通行人を制御したか、と思うとせかす、という行為を一日中何度も何度も繰り返す。

IDカードを見せて何の問題もない通行者には、オリットはしばしばつぎのようにいってIDカードを返し、通行を認める。

Shukuran, wassalama.

ありがとう, さようなら(アラビア語)。

これがイスラエル兵士が知っているアラビア語の全てだ。おもに命令形でなるこのブロクン・アラビックを兵士たちは勤務の間——オリットならば、9ヶ月間、単調に繰り返す。

2. 2. 'アラビア語'の欠如, 通訳の欠如

このベイト・イバでのチェック・ポイントに配置される兵士の中にアラビア語を正規に学習した者はいない。イスラエルの中高ではアラビア語を必修にしている学校が多く、その中でよく学習したものは流暢にアラビア語が話せるというのである。

兵士の話すアラビア語は第二次世界大戦中に占領した地域での日本軍の現地語のように、初歩的であり、命令形と単純な名詞形の羅列である。ヘブライ語とアラビア語は同じセム語族に属し、文法構造や数多くの語彙を共有する。だが、パレスチナ人の成人はヘブライ語を理解するのに対し、イスラエル側はアラビア語を全く理解しない。

兵士には流暢に英語の話せるものもない。やはり、イスラエルには英語が流暢な高校卒業生が数多くいるというのである。兵士がちょっと込

み入ったことを質問し、それにパレスチナ人が返答するときでもそこに通訳と呼ばれるものも待機していない。兵士たちはそのときの状況に従ってにわか通訳を探そうとして、パレスチナ人に、「英語のできる者はいないかあ」と大声で呼びかけ、誰かが借り出される

2. 3. 沈黙

イスラエル兵士側が饒舌であるのに対し、パレスチナ人は不気味なほどの沈黙を通す。質問されたときでも最小限の答えをするのみである。下記のようにジョークを飛ばす兵士の前でも通行人は黙って微笑むか目をそらすだけだ。

2. 4. ジョーク、冷やかし

兵士はIDカードを照会するさい、相手が若い女であるときにはしばしばジョークを飛ばす。午後4時になって、オリットの拘束時間が過ぎるとチェック・ポイントにいる女性はMWのメンバーのみになる。今度は男子兵士が女子通行者をチェックすることとなる。

灼熱の太陽が傾き始めると、兵士も疲れを見せ始め、注意力も散漫となり、ジョークや冷やかしなどで自分を活性化しているかのようだ。それらはブロークンな英語や単純なヘブライ語でなされる。そうした兵士たちに通行人は（近くにあるBeit Berilなどの大学に通う女子学生が主）黙ってうつむいて通り過ぎる。以下はRon（仮名、以下ロンと表記）の女子学生への会話である。

2) ロン:

Hey, Do you speak English?

Yeah. How are you doing?

Do you know 'sucking-backing', hey.?

‘へい、英語話す？

ねえ、元気？

sucking-backing[㊦]って、知ってる？’

また、女子学生らしい通行人の大きなビニールバッグをみて、次のように言う。

Pijamot? Mesibat pijamot?

‘パジャマ？ パジャマ・パーティー[㊦]？’

(通行人は黙って微笑む)

‘I want to be in the party.

Can I come to the *mesibat pijamot*?’

僕もパーティーに行きたいよ。行っていい？

ロンはIDカードを返してやる。

しばしば兵士たちは、ボックスの前に置いてあるおもちゃの手榴弾を手にもって、にやっと笑ったり、ライフルを向けたりする。すると女性通行人たちはわっと後ずさりする。

IDカードや許可証の無い者

30歳以下の男性が通過するにはIDカードのみでなく、特別に交付される許可証がなければチェック・ポイントは越えられない。そうした人たちは道の隅にあるテントの下で、当局がそれぞれの身元を確認するまで何時間も待ち続ける。待ち続けたところで通過の許可が下りるという保証はなく、実際、当日は終に6人ほどのひとびとが通過できず、チェック・ポイントが閉鎖される午後6時まで無駄に時を過ごしただけだった。女子の場合にはIDを持参していない者はボックスの横で、その人の身元が確認されるまで立ったまま待ち続ける。この日は一人の女子学生と、二人一緒にやってきた女子学生が、IDを持参していないために立ち往生した。兵士はそれぞれの身元を確認するために父親の父親の名前、母親の父親の名前などをヘブライ語で訊ねる。

身元確認の依頼の電話を入れてから1時間。その15分ぐらいまえには、5回もあくびをしていたオリットが、待っている通行人に一瞥もくれず、勤務時間が終わったとって宿舎に帰る。

4時45分、一人待っていた、ベール、長袖のブラウス、ズボン姿の女子学生がすすり泣きながらMWのメンバー、ナオミと筆者にいう。

‘What should I do? I cannot take the (last) bus. The bus is coming in five minutes’.

ナオミが兵士のリーダー、マタムに伝えるが、マタムは無視したまま。

ナオミは業をにやして、ヘブライ語でマタムに、

「どうみたってテロリストなんかには見えない子
なんだから、出してやりなさい。」という。マタ
ムは耳は貸すが許可は出さない。中央警察の身元
確認は一向に行われぬ。

次ぎに来た二人の女子学生の場合も同様であっ
た。IDカードを持参していない3人は全て身元
確認が午後6時前にできずにナブロスにUターン
しただけだった。

7月の炎天下、通行人はヴェール、化繊の長袖
ブラウス、長ズボンまたはロング・スカートで何
時間も黙って立ち続け、そのうち3人はあきらめ
て帰っていった。

他国のパスポート保持者

スウェーデンのパスポートを所持する女性がチェッ
クを受ける。兵士のリーダー、マタムがボックス
の横にその女性を呼び寄せ質問し始める。

3)

1. マタム：What are you doing here?.
2. 通行人：I have been shopping. I am
visiting my husband.
3. マタム：Where is your husband?
4. 通行人：He is not here.
5. マタム：How long are you going to
stay?
6. 通行人：One month, well, maybe two
months.
7. マタム：Listen. I of course let you
stay here, but why are you
going to Sanu?
8. 通行人：Sanu? that's where my fam-
ily lives.
9. マタム：I let you go now, but next
time you cannot go.
10. 通行人：Why? I am just visiting.
11. マタム：Well, next time you will not
go.
12. マタム：Ok? Listen. Even I cannot
go to Nablus. Only people
with Palestinian IDs can go.
So ok? You are not eligible
to go. Why do you want to
go to Nablus?

13. 通行人：I don't know.

14. マタム：Next time, if you want to
go, you have to get a per-
mission first, just call a few
days before your visit.

15. 通行人：So if I send a permission,
can I go?

16. マタム：Yes.

17. 通行人：Thank you. Bye.

2002年以降外国人がイスラエルに入国する際、
占領区には行かないことを約束させられる。そう
いう意味では、イスラエル側の規則上は、外国の
パスポートをもったひとはナブロスにはいないこ
とになる。同時にマタムが、'Even I cannot go
to Nablus.'と言っているのは興味深い。イスラ
エル人は個人でちょっと遊びに行くことはできな
いが、イスラエル軍として、攻撃・侵入はできる
という矛盾をこの兵士は知っているはずである。

3. 非言語的側面

サボタージュ I 一 道具の不在

イスラエル兵は、パレスチナ人の個別的な事象
に極端な無関心を示す。また、彼らは、武器以外
いかなる機器をももたないことにより、どのよう
な機転もきかないことを明示している。通行人が
ブーム・ボックス、コンピューターなどの大きな
製品を持って通過する場合、兵士はそれらの機械
をこじ開けるように命令するのだが、開けるのに
不可欠のスクリュー・ドライバーやペンチなどの
用具が一切ない、あるいは、「ない」という。ま
ずは用具探しをするのに数十分を要する。連日こ
のような大きな機械を抱えてひとが通るのだから
道具箱があって当然なのに、それがなく、といい、
開けるものはないか?と私のような第三者や通行
者に訊く。

サボタージュ II 一 コンピューターの不在

IDや特別許可証をもっていなければパレスチ
ナ人はチェック・ポイントを越えることはできず、
兵士が中央部に携帯電話をいれてその身元を確認
するまで何時間も待たされる。その場で身元確認
はできそうなものだが中央は何時間も要するらし
い。ハイテク産業が非常に発達、軍事情報獲得に

秀でたイスラエル軍のチェック・ポイントにコンピュータが1台も無い。ここにはやはり身元確認の手段をあえて欠如させることにより、通行人をシンボリックにコントロールする構造がみてとれる。

4. Machsom Watch-Group for Human Rights

ボランティア・グループ Machsom Watch とは、チェック・ポイントでセキュリティとは無関係の非人道的な行為が行われていないかを監視する女性団体で、インティファダⅡが始まりエスカレートした2001年1月に、3人の運動家を中心に、インテリ、文筆家などで結成された (Cohen 2004, Kadmon 2003, Kubler 2002, Segev, 2002)。

1987年に始まったインティファダⅠで、すでに、イスラエル兵士がパレスチナ人に暴力を振るったり、女性を銃で殴ったりしているところがビデオや写真で世界を巡り、イスラエルの無謀ぶりが批判された (高橋：1992, 立山：1995)。

2001年、その種の暴力を野放しにはできないと、イスラエル・ユダヤ人女性が有志をつのり、*Machsom Watch* というボランティア・グループを結成する。このグループは、英語名は *Women for Human Rights* といい、その活動の目的は、そうしたイスラエル兵士の無謀ぶりを監視しようとものである。現在は、19のチェック・ポイントで、400人強のメンバーが順番に兵士の行動をチェックしているが、より根本的には、そのゴールはチェック・ポイントの存在自体を否定することにある (Kadmon 2003)。

MW は、チェック・ポイントに立ち、兵士の行動に介入、パレスチナ人を不当に待たせていることを「非人道的」と定義して、待たされているパレスチナ人と兵士との間の仲介者として歩き回る。MW は当初は独立戦争を経験したといった年配の人たち、そして、自分たちの息子や娘が兵役中にある、といった人たちで立ち上げられたが、今日では、母親が MW のメンバーだといった、第二世代も積極的に入るようになった。

職業婦人や主婦たちのそうした活動は一見無駄であるかのように思われるが、意外なほど MW は機能している。上記のベイト・イバで通過を止められ、一時はどうなることかと身を案じた日本

人研究者 H 氏を救ったのも MW である。筆者がいたときに、病院に行くために許可証をもらっていたにも拘わらずテント下に足止めされた青年を通過させたのも MW だった。筆者も、MW のメンバーの寛大さがなければ、チェック・ポイントに立つような機会は得られなかったはずである。MW は、兵士の任務に干渉してはならない、パレスチナ人とは話してはならない、などという規則はあるが、そのような規則に盲目的に従うことはない。

MW は、チェック・ポイントでの兵士たちが自分の息子たちと何ら変わらないという心情に訴える。自分の息子が近くのチェック・ポイントで、「同じ人間であるはずのパレスチナに暴力を振っているのではないかと思うと、いてもたってもいられない」というのである。

実際3ヶ月も親元を離れている18から21歳の兵士たちにとって、横で母の“愛”を説く MW の力は大きい。もともと高等学校を卒業したばかりの青少年なのだ。さらに、イスラエル・ユダヤに特徴的な、密な母子関係、あるいは「母」のシンボリズムが多かれ少なかれ関わっていると思う。

MW はコンスタントに各チェック・ポイントで起こった出来事をウェブページにヘブライ語と英語の両方で載せている。最近載ったものとしては、2004年11月、兵士が、バイオリンを携えていた通行人に、「ここでバイオリンを出して弾いてみる」といったところを描写、その演奏も録音してウェブで流した。また、2005年1月には、MW の介入にいらついた兵士がメンバーのひとりをお殴りした、と報告されて新聞にも大きく報道された (news.walla.co.il, 2005)。

一方で、MW をイスラエルの裏切り者とし、MW と同様、「母としてイスラエルを守る」、と宣言、ウェブページに連日メッセージを載せ、MW と文字通りウェブ戦争を起こしている右派女性グループ *Women in Green, Blue and White* などがある。これらは、入植者の女たちを中心にした団体で、MW を極左と呼び、その行動をハラスメントと断定し、兵士および、イスラエル全国民の生命を危険にさらすものとしている。「MW のせいでテロの数が増える一方だ」というのである。

“Danger! Machsom Watch-collaborators

with the Arab enemy” という色刷りのビラやステッカーを流布しているのもこのグループである。Women in Green の代表者は次のような文で成る報告書を新聞社などに送りつけている。

“—All the soldiers and Border Guard policemen and women at the checkpoints agree on one thing: the time has come for someone to defend them against the acts of harassment by the extreme left and the Arabs. They praise the activity of Women in Green and hope that it succeeds (Matar:1)”

イスラエルの現在の状況からしてこのような辛らつな批判が出てくるのは自然のことであり、実際、MW のメンバーになった、というだけで、離れていくイスラエル人友人は多いらしい (MW メンバー: p.c.)。しかし、MW のほうは、こうした批判は無視したまま自己の活動を続けている。イスラエルでの内紛にかまっているよりは、急病、出産といった状況でも病院にすぐに駆け込めない人びとを放っておけない、という、まっとうな考えを持った人びとが MW のメンバーである (Machsom Watch: 2004)。

5. 終わりに

ベイト・イバのチェック・ポイントでよくジョークを飛ばしていた青年兵士ロンが云う。

I can go back to my home only three days per forty days. I wish I could go to Eilat for fun, having fun with bachorot at beach.

‘40日に一回だけ3日間家に帰れるんだよ。エイラットにでも行って女の子たちとビーチで楽しんでいたいのにさ。’

さらにロンは、「悪さをすれば、罰として、家に帰される一返してもらえるんだよね。」と目配せした。兵士はすき好んで、パレスチナ人を上記のように扱っているのではない、と語る。40日間連日境界線に位置する兵舎に住まわされ、家族や

友人からも離され、命令調のブロークン・アラビックを連発する青年たちは、兵士になる前にもっていった正常な精神状態を維持できなくなる。

2003年には、ガザ地区とのチェック・ポイントで、暴力が日常となり、ぎりぎりの精神状態に達した青年の吐露が出版され、多くの元兵士のシンパシーを得た (Ron-Furer: 2003)。また、MW のメンバーであり、人権運動家、文筆家である Lia Nirgad がエルサレム郊外の最大のチェック・ポイント Kalandia での日々の出来事をその著書 *Choref beKalandia* ‘カラディアの冬’ で詳しく描写している。

ドキュメントタリー、セミ・ドキュメンタリー・フィルムもチェック・ポイントでの問題を扱いつつ始めている。イスラエル側のもは「安全」なもの、あるいはイスラエル・パレスチナの和平共存をメッセージとするものであり、深刻な問題は語られていない。たとえば、Machsomim (2003) ‘チェック・ポイント’ は、10以上のチェック・ポイントでカメラを淡々と回し続けて、兵士がパレスチナの子供に、「ぼうや、年はいくつ？」と握手をしているシーンのスティール写真がビデオのケースに使われた。

一方、パレスチナ側で撮られた *Journey to Jerusalem* (2004) は、チェック・ポイントゆえにエルサレムの子供たちに映画を見せに行くことさえままならない中年の男性を描き、*Arna's children* (2004) の最初のシーンでは、闘士アルナがチェック・ポイントで立ち往生する何十台もの車に向かって「もっと強くクラクションを鳴らせ」と鼓舞し、イスラエル支配下での「やるせなさ」を描き出す。

チェック・ポイントはテロの防波堤だ、とイスラエルはその存在を疑問視すらしない。ベイト・イバのチェック・ポイントは、テロリストを最もおおく輩出するナブロスとの境界線にあるという点で、かなりの緊張感が漂う。筆者が立った日の終わりには、MW のメンバーは、「今日は何事もなくて良かった」とほっとしていていたが、実際、その何日か前には、ろばの引く荷台にライフルが隠されていたのが発見された、というし、2週間まえには上記のオリットが若い女性に、隠していたナイフで刺されそうになった (MW メン

バー：p.c.)。

1ヶ月以上も、高校をでたばかりの若い青年たちを兵舎に閉じ込め一日中パレスチナ人をチェックさせる、と言う点で、そして、上記の言語使用状況からもみられるように、あえてコミュニケーションを最小限にとどめている、という点で、チェック・ポイントはイスラエルとパレスチナ間のパワー関係の縮図である。なぜアラビア語を流暢に使える兵士がいないのか、という問いに対し、元兵士だった女子大生は、「チェック・ポイントにいる兵士は言語力じゃなくてそのフィジカルなところで配置されるから。」と答えた。万が一のテロに備えてすぐに闘える兵士が必要なのだ、という。チェック・ポイントを通過する女性の数が男性の数とほぼ同じなのに、監視する女性兵士がひとりしかいない理由もそこにあるのだろう。

チェック・ポイントでの言語活動では、兵士とパレスチナ人との問題だけでなく、兵士とアラブ人の女との問題が見え隠れする。ヴェール、ロングスカートで身体を被い、沈黙を続ける女たちを、イスラエル兵士はライフルを持って威嚇したかと思うと、からかい、冷やかす。

スコットは、弱者のレジスタンスとして、主体、行動をあえて不可視のもの、あいまいなものにする傾向を論じている (Scott: 1985)。通行人は、とてつもなく大きな荷物、コンピューター、テレビ、ブームボックスを黙々と運ぶことによって、IDカードを忘れてくることによって、ヴェールと手の込んだ刺繍のほどこしたドレスに身を包み、身なりをきちんと整えることによって、兵士の子供じみた態度を黙って一瞥することによって、ヘブライ語に対して沈黙を維持することによって徐々にそのレジスタンスをすすめているかのようだ。

本論は、チェックポイントの問題を提示するのみで終わる。今後さらなるデータ収集とその分析をすすめるつもりである。

Bibliography

- Bart, Denise 2004, Watch Out., *Zomet Hasharon*, 06.06.04
 Cohen, Danya 2004, Checkpoint Diary., *New Voices*, October 2004
 Forer, Liran Ron, 2003 *Tismoret hamachsom*

'Checkpoint syndrome.' Tel-Aviv: Gevnim.

- Grant, Linda 2004, Checking on the checkpoints., *The Guardian*, 2.2.04
 Hass, Amira, 1996 *Drinking the sea at Gaza: days and nights in a land under siege*. New York: An Owl Book, Henry Hold and Company.
 — 2002, A checkpoint for life, *Ha'aretz*, 27.11.02
 Kadmon, Sima., 2003, Many Mothers., *Yedioth Ahronoth*, 21.11.03
 Kubler, Gunhild, 2002, Who watches the soldiers? *Neue Zürcher Zeitung*, 21.7.02.
 Levy, Gideon, 2003, I punched an Arab in the face-a soldier's testimony. *Haaretz*. 27.11, 2003.
 Machsom Watch, 2002-2004 Reports. www.machsomwatch.org.
 Matar, Nadia, June 2004, Report No.1, Women for Israel's tomorrow-Women in Green.
 Nirgad, Lia. 2004 *Choref beKalandia*. 'Winter in Qalandia'. Tel Aviv: Hargol.
 Rubinstein, Danny 2002, Cast away, *Ha'aretz*, 20.10.02
 Schafer, Peter, 2003 It's all Arbitrary., *Neue Zürcher Zeitung*, 15.4.03
 Scott, James C., 1985, *Weapons of the Weak: the everyday form of peasant resistance*. New Haven: Yale University Press.
 Segev, Tom, 2002, Women of the checkpoints, *Ha'aretz*, 10.8.02
 Steele, Jonathan, 2002, Women at barricades keep an eye on their defenders *The Guardian*, 14.8.02
 Tahseen, Yaqeen, 2003 Crossing at Qalandia., *Jerusalem Times*, 1.3.2003
 高橋和夫 1992「アラブとイスラエル：パレスチナ問題の構図」講談社現代新書。
 立山良司 1989「イスラエルとパレスチナ：和平への接点をさぐる」中公新書。
 i ここで、MWのメンバーで、チェック・ポイントに筆者を誘ってくれた Shely Mahari Schendar, また、早尾貴紀氏のアドバイス、日吉靖徳氏の惜しみない資料提供、立花希一教授の的確なコメン

- トに心から感謝の意を述べたい。
- ii 基本的にナブロスに一般イスラエル人は入れないという意味で、ベイト・イバのチェックポイントは当然、パレスチナ・アラブ人のみが通過するところとなる。他のチェックポイントではイスラエル人のもつ灰色がかかった青色の ID カバーとパレスチナ人のもつオレンジの ID カバーが見られる。
 - iii 筆者は、ロンに「それはどういう意味？」と訊ねたが、彼は、「さあ。」とって笑った。
 - iv 子供たちが金曜日の晩によくするお泊り会のこと。大人が言うと、オージーといった、猥雑感がある。
 - v 後、このビデオケースのカバーはイスラエル国内用のもの、国際向けのは、別の写真が使われていることがわかった。